【11】

氏　名（国籍）	マ．ジェシカ　ペンソン　カンパノ（フィリピン）
学位の種類	博　　士（体育科学）
学位記番号	博　甲　第　3558　号
学位授与年月日	平成 16 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	**Anger Management：A Cognitive Behavioral Approach to Student Aggression in the Philippines** （アンガーマネジメント－フィリピンにおける学生攻撃性に対する認知行動的アプローチ）

主　査	筑波大学教授	保健学博士	宗　像　恒　次
副　査	筑波大学助教授	博士（心理学）	坂　入　洋　右
副　査	筑波大学助教授	博士（体育科学）	中　込　四　郎
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	石　隈　利　紀

論　文　の　内　容　の　要　旨

中高生の暴力的行為は学校教育の現場にとってどこの国でも悩ましいことであるが，フィリッピンでも例外ではない。1996 年調査によれば，フィリッピンでは 14 ～ 21 歳が関与する犯罪，暴力，薬物使用などの発生率が高く，増加傾向にある。

本論文は，体育科学研究科で認知行動論的アプローチの教育訓練をうけた高校の保健体育教師が，フィリッピンの中高校生の怒りと攻撃行動に対するマネジメントのための介入教育プログラムを開発し，評価をおこなった研究である。

この種の研究は米国ではみられるが，アジア諸国ではまだまれである。攻撃心や暴力を引き起す怒りには，先行研究から生物的，社会環境的，心理的，学習的要因があるといわれている。ソーシャルスキル，セルフエスティームなどの向上のための教育介入プログラムによって，怒りや攻撃をコントロールする認知や行動を持続させることを促すのが本研究のねらいとされた。

まず研究Ⅰでは，大都市マニラ市の私立 2 校，公立 2 校の中高校の生徒（1 年生～ 4 年生）の自記式質問紙調査（792 名）を通じて，怒りと攻撃行動をマネジメントする教育プログラムの必要性について明らかにし，また怒りや攻撃性のマネジメントには共分散構造分析の結果から，セルフエスティーム，自己効力感などが関与していることを明らかにした。また，学年があがるにつれて，セルフエスティームや自己効力感や情緒的コントロール感などが高まり，観測変数が身体的，言語的攻撃心，怒り，敵意からなる潜在変数の攻撃性が低下していくことが明らかになった。これはマニラ市内の中高校で実施されているソーシャルスキルトレーニングが影響している結果と考察されている。

研究Ⅱでは，各生徒の怒りや攻撃性の評価について，自己評価式，仲間評価式，教員評価式でそれぞれ検討されたが，怒りや攻撃性は自己評価，仲間評価，教員評価間で大きく違いがあることがわかった。またミンダナオ島の大都市ダバオ市では，家父長的伝統性が残り，伝統的社会の文化性の中で自己抑制が社会的に

求められる。そこでの中高校の生徒の調査（650 名）では，研究Ⅰのマニラ市調査の結果とは異なっていた。すなわち，教員評価で攻撃性がないと判定しても，本人自身の評価では自己抑制させられやすいためか，本人が評価する自らの攻撃性がかえって強まっていることを研究ⅠとⅡの学年差などの比較分析で明らかにした。ダバオ市調査では，マニラ市調査とは異なって，学年があがるにつれて生徒本人の評価では攻撃性は高まっていったが，教員評価ではその反対となった。つまり，教員からみると，学年が高くなるにつれて攻撃性は低下しているが，本人の怒りや敵意や攻撃心が内攻しているものと考察された。ダバオ市調査とマニラ市調査の結果の違いにもかかわらず，セルフエスティームは身体的，攻撃的，言語的，言語的攻撃性，暴力的表現と逆相関することは同様である。介入教育プログラムでセルフエスティームの上昇させることで攻撃性が低下するものと推察された。いずれにせよ，本人，仲間，教員の三つの立場から評価し，教育介入プログラムの効果性を測定する必要性が明らかになった。

研究Ⅲでは，怒りと攻撃心のコントロールのための教育プログラムとして，米国の心理学者 A. ゴールトスタインの構造化された教育プログラム（4 週間毎日の 1 時間セッション）を用いて，生徒（介入群 22 名，非介入群 22 名) を対象として攻撃性マネジメントについて介入教育研究がなされた。教育プログラムとしては，ソーシャルスキルトレーニング，アンガーコントロールトレーニング，共感トレーニングからなる。介入前後の結果，教員による評価では統計的に有意な効果があったものの，本人や仲間評価では有意な効果がなかった。これは教師がみた外面的な攻撃性が低下しても，内面的な攻撃性が低下しなかったといえると考察されている。

そこで，研究Ⅳでは教員中心の論理的教育法になれないフィリッピン生徒に適合するために，生徒達が自己決定するプロセスを尊重する集団力動性を用いた認知行動的アプローチを用いた。本研究者は体育科学研究科で集団力動性を構造化されて方法で利用する指導教官の開発した SAT グループカウンセリングの方法を身につけたのち，ゴールドスタインの教育法を変え，生徒の集団力動性を利用した独自の教育プログラム（4 週間毎日の 20 セッションで 1 セッション 60 分）を開発した。介入群 16 名，非介入群 16 名への介入結果の比較分析では，本人，仲間，教師のそれぞれの評価によってソーシャルスキル，セルフエスティームが向上し，攻撃性が介入の前，後，6 ヶ月後フォローアップでもその効果性が明らかとなった。

すなわち，アンガーマネジメント教育介入の 6 ヶ月フォローアップ調査の結果，非介入群が変化しなかったことと比べ結果，介入群はアサーションやリスニングなどソーシャルスキルが有意に高まり，セルフエスティームが有意に上昇するとともに怒りや攻撃心の低下が，自己評価，仲間評価，教員評価がともに変化し，それが 6 ヶ月間持続したことが明らかになった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

これまでアジア諸国，たとえば日本でもフィリッピンでも，中高生を対象にして保健体育教師がアンガーマネジメント教育を実施し，フォーアップ調査をする研究はその必要性は高いにもかかわらず，まだまれである。

本論文の評価できる点としては，1）フィリッピン中高生を対象に大量調査をして，怒りと攻撃性の要因がソーシャルスキルやセルフエスティームと関連していることを米国の先行研究にならって明らかにしたことである。また，それがマニラ市のような首都と，地方の大都市とでは社会文化的背景の違いから生徒の攻撃性に関する模様が異なることを考察したことである。

また，2）怒り，攻撃心や暴力についての評価は本人自身，仲間，教員の三つの立場からなされ，より客観的な評価法をとれたことである。

3）保健体育科の先生である本人自身による介入教育プログラムで，ソーシャルスキル，アンガーマネジ

メントスキル，セルフエスティームの上昇を促すこと介して，怒りや攻撃性が6ヶ月間低下することを明らかにしたことである。

また，4）指導教員の開発したSATグループカウンセリングスキルの学習を通じて，これまでのような介入者中心のプログラムではなく，集団力学を応用した生徒中心のアンガーマネジメントプログラムを創造的に開発したことである。

その研究の一部はAdolescenceという一流国際雑誌に寄稿され，受理された。今後研究者として独立してやっていける見通しをもてたことを評価したい。しかし，論文の表現方法でさらに工夫や彫琢が必要なところがあり，これからの努力が期待される。博論の他の部分も一流国際雑誌に投稿し，創造的研究者として育って欲しい。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。